大地の子守歌

素九鬼子

筑摩書房

の子守歌

素九鬼子

筑摩書房

大地の子守歌

一九七四年一一月三〇日　第一刷発行

著者／素九鬼子

発行者／井上達三

発行所／株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三郵便番号一〇一―九一

印刷所／暁印刷

製本所／和田製本

表紙木版／松本ひろみ

装幀／加藤光太郎

© K. Moto. Printed in Japan 1974

（分類）0093（製品）80111（出版社）4604

大地の子守歌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ある朝起きてみると、りんの横に寝ているばばが冷とうなっておりました。揺り起こしてみました。けれど、そんなことをしてみるまでもなく、ばばが死んでいることがわかりました。怖いという気持はありませんでした。つらいという気持もありませんでした。どうしたらよかろ、ということだけで、もう、頭の中はあつうなってきたのでありました。

寒い夜でありました。炬燵に火を入れて寝ておりました。それでもそんな小さな火種は、とうに朝までには灰になっておりました。掻きまぜると、冷たい灰が煙のように立ち昇りました。それは旧暦十月の亥の子の晩からかぞえて、二日後のことでありました。

「今晩はお亥の子はんじゃけん、炬燵いれてやるけんのう。」

ばばが、その晩にいうたことを思い出しておりました。その晩を境に、山の部落では炬燵をかけることになっておりました。この日に火入れをしたら火事にならぬ、と言い伝えられているのでありました。

ばばが曲った腰で畳をはがして掘炬燵の用意をしているときに、それを手伝いもせず、りんは外へとび出しておりました。子供らが各家ごとに亥の子の石をついてまわるのを、根気よう追い廻し

ておりました。家ごとに祝儀袋や、甘藷や里芋でついた餅を投げてくれました。それをしまいには、おりんにも分けてくれるものと待っていたのでありました。

「あっちへ行け！」

何べんもそういうて怒鳴られました。けれども、りんは平気で男の子らの後をつけて歩いておりました。

「亥の子、亥の子、亥の子餅ついて祝わん者は、鬼生め、蛇生め！」

りんも一緒になって歌うておりました。

「女だてらに！」

そういうて、石を投げつけられもしました。それでも、りんは何喰わぬ顔をしてついて行きました。

やっと餅を三つだけ貰うて走って帰って来たときには、もう夜になっておりました。暗い道を走って戻って来ると、ばばは心配して戸口に立って待っておりました。

「さぶかろが、はよ炬燵に入れ。」

「たった三つしかうちには餅をくれへざった。銭は一文もくれへざった。来年こそは何といわれてもあの亥の子の石をついてやる。」

「女の子はそれはせんもんじゃ。あれは、男の子の祝いじゃけんの。」

「男も女もあるかいの。さ、ばばに二つやろ。うちは一つでええ。」

炬燵の火でその餅を焼いて、ばばと二人で食べたのでありました。あれは、ほんのおとついのこ

とでありました。

障子に朝陽が射してきました。おりんは泣くまいとして唇をかんでおりました。

「ばば！　ばば！」

つぶやくようにいうておりました。ばばが、日頃、事ある毎におりんに噛んで含めるようにいうていたことを思い出しておりました。

「ばばはもうええ年寄りじゃけんの、どっちにしろ、おりんよりは先にあの世へ往かんならん。いや、今日や明日ということはなかろうがの。そんでも、それほど遠い先のことじゃなかろ。人間はだれでも死ぬるんじゃ。その日になって、わいのわいのと泣いて騒がんように、常から、ばばはおりんよりも先に往くもんじゃと、ように心に入れておけよ。」

「ばばが死んだら、うちはどなにしよう！」

「さあそのことじゃ。そじゃけんええ子でおらんといかんのじゃ。ええ子でさえおったら、誰ぞがおりんを引き取ってくれる。ええ子でおったら誰がおりんを見捨てるぞ。けんどの、いうとくが、そのときになっても、人にへえこら頭を下げて行くことはないぞよ。おりんはおりんらしゅうに、ばばのいうようにええ子でさえおったらそれでええんじゃけんの。」

ばばはよう、そういうておりました。冷たい風が家の中に入ってきました。庭の柿の木が揺れていました。その影が障子にうつっておりました。

おりんは庭に走り出て行きました。峠をやって来る人の姿が見えました。朝もやの中で、その人

の姿が見え隠れしておりました。いつもならば、大声で呼びかけているところでした。おりんは手を振りかけて、やめました。どうやらあれは下の村からやってくる干物の行商人に違いありませんでした。うっかりしていた、あの男に今、ばばの死んだことを感付かれると困る、と考えました。他人は信用できぬ、後でとんでもない噂を撒き散らされる。ばばが死んだというのに、おりんはわしに手を振ったぞと面白げに触れまわるのでした。すると皆はそれにつられて、どこまで妙なおりんじゃろうというにきまっておりました。何か事があると、それはねじ曲ってでしか伝わらぬ、奥山の部落のことでありました。

できるだけばばの死んだことは隠しておこうと考えました。誰が家にやって来ても中に入れないようにしよう。ばばに用のある者でも、ばばは居らんというてやろう。寺へ働きに行たとか、妙見さんへお参りに行たとか、山へ薪を取りに行たとか、その場をとりつくろうておけばよい。そしてそのうちにどうしたらよいかを、じっくりひとりで考えよう、とおりんは思いました。

いざとなると、度胸が据ってきました。さっそく火を起しました。炬燵に火を入れました。ばばに、寺参りに行く時の着物を着せました。なんとなしに、こういう時にはこうしてやるものじゃと、思うたからでありました。継ぎの当ったぼろの上に、その着物を着せるときは苦労しました。ばばの冷たく突っ張った手が、なかなか袖に通りません。折り曲げようとすると、力が要りました。ばばの体をうごかすたびに、かつかつという小さな音がしました。ふところに何を入れているのかと調べてみました。けれどそれは、頑丈なばばの奥歯の上下が、こすれて鳴っている音でありました。

「さあはよ手を通してくれ。髪もといてやる。顔も拭いてやるぞ。それからばばは炬燵に入っとれ。うちが墓をこさえてやるけんの。山のじじの横がええか、この家の庭がええか、ように考えてやろわいの。心配いらん。うちがひとりでみんなしてやる。安心しとれ。」

おりんは、それこそ真剣でありました。

谷から水を汲んで来るとき、部落の者に出会いました。

「今朝はおりんが水汲みか。えらいのう。」

「うん。」

「ばばにいうといてくれんか。昼からなめこ取りに行てみんかとのう。」

「ばばは具合がようないんじゃ。」

いいかけて、これは、と思いました。どこぞふうじゃかと、立寄られては困るのでした。

「それほどのことはないけんどのう。」

すぐに打消してはみたものの、やっぱり不安でありました。前と後にかついだ桶の水が、着物や足をびしょびしょにぬらしました。坂道ですべりそうになって、木の枝にしがみつきました。鳥が飛び立って行きました。まわりの山は、まだ半分眠っておりました。一筋の桃色のもやが、峠のあたりに漂うておりました。峯々は、まだ重い白いもやをすっぽりかぶっておりました。りんは白い息を吐いておりました。足元がふらつくたびに、朝やけの空を見上げておりました。

湯を沸かしていると、ようやって来る野良犬が、裏口から入ってきました。りんは、犬を抱き寄

せて燃える火をみつめておりました。犬のぬくみが、肌に伝わってきました。犬の息がおりんの頬にかかりました。抱きしめると、犬は目を細めました。が、いきなり身をもがきました。無理やり抱きすくめようとすると、はげしく吠え立てました。

「やかましい！」

おりんは、そういうて、犬に火吹竹を投げつけました。犬はますます吠えたてました。吠えながら、釜屋をぐるぐる廻りました。それから、よまに上りました。ばばの寝ている炬燵の脇へ寄って、またひとしきり吠え立てました。おりんは慌てて犬を追い払おうとしました。火のついた棒切れを振りまわして、犬を追い廻しました。犬は炬燵のまわりをぐるぐる逃げました。

「静かにせい！　ばばが起きるが！」

りんの、声を殺した気迫にのまれて、犬はこそこそと土間へ下りて行きました。おりんはくすぶる棒を犬に投げつけて、しばらくよまに突立っておりました。それから堰を切ったように、はじめて声を出して泣きだしたのでありました。

「ばば！　ばば！」

泣きながら、りんはばばに体ごとすり寄ってゆきました。ぞっとするほど冷たいばばでありました。それでもつよく、ばばにしがみついてゆきました。ある臭いが、鼻につきました。けれど、そんなことは気にはなりませんでした。ばばの頬をこすっては、息を吹きかけてみました。ばば！と耳に口をつけては呼んでみました。石ころみたいにごつごつしたその足に、おりんの足を重ねて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

こすりました。抱き起して、揺すってみました。にぎりしめたばばの手を、一生けんめいに開いてみようとしました。

夢をみているのかもしれん、とりんは頭を振ってみました。夢ならそのうち醒めるじゃろう。うなされて、涙をながして、ようばばに揺り起されたことがありました。よう恐ろしい夢をみるのでした。ああまた夢の中でうなされている、と思い込もうとしました。夢がさめたら、またばばに夢の話をしてやろう。おりんはひどい夢をみたものじゃというだろう。こんど夢が醒めたら、もう二度とこんないやな恐ろしい夢をみずにすむように、ばばをだいじにしてやろう——。

風に庭の柿の葉が鳴っておりました。障子に枯葉が舞いおちてきました。はらりと舞いおちるその影が、恐ろしいほどに鮮かでありました。隙間風に吹かれて、畳のほこりがころがってゆきました。やっぱり、これは、夢なんかではない。りんははっきりとそう納得していったのでありました。

燃える火の前で、犬はまだ吠えておりました。逃げ道のない煙が、たてつめた家の中にたまってゆきました。青い煙のかたまりが、暗い土間の屋根裏で、ゆっくりとぐろをまいておりました。おりんは流れる涙を乱暴に袂で拭いたのでありました。

「かまん。これからはひとりで行く。だれにもばかにされはせん。負けはせん。怖いことなんか何もありはせん。ばば！　そうじゃろが。ばばは、もう、死んでしもうた！」

おりんは跳ね起きました。そして、土間にとび下りて、罐子（かんす）に沸きこぼれていた湯を桶に取りました。その湯で、まず涙の顔を気のすむまで何べんもこすりました。それから、あつい湯に顔をつ

けて、息を殺しておりました。

おりんはいつまでも桶の湯にとっぷり顔をつけておりました。そして、苦しゅうもがきながら、顔を真赤にして泣いていたのでありました。

†

おりんは扱葉(こくば)をかきに、ちょっとの間裏山へ出掛けて行きました。気をぬいたわけではありませんでした。そのときにもちゃんと家の戸は閉めてありました。中から棒でつっかいをして、外からは、誰人もうかつに入れぬよう工夫をしてありました。裏の戸を最後に閉めるときには、その重い戸を少し持ち上げて、その下に石ころをつめておきました。こうやっておけば、野良犬も侵入できぬはずでありました。ふらりとやってきた者があっても、戸という戸は、びくともするものではありませんでした。障子の破れ目は、念入につぶっておきました。

木地屋の源蔵がやって来ました。別にこれというた用向はありませんでした。ばばの甥にあたるこの男は、たまにやってきては、一服つけて行くのでありました。籠を背負うて山道をのぼってゆくおりんの後姿を、この男は谷の橋場で見かけたのでした。りんもけなげなことよと、それをばばにいうてやろうと思いました。ばばは何よりも、おりんがほめられることを喜んだからでありました。

すると、まことにおかしなことでありました。家中の戸が、かたく閉ざされておりました。ばばよ、といくら呼んでみても返事がありません。留守か、と源蔵は思いました。村へ下りたか、りん

よりも一足先に山へ行ったか、と思いました。それとも、昨日から奥山へしめじ取りにでも行ったのかと。それにしても、念の入ったことでありました。いつでも、戸は自在に開けられるのでありました。こんなことは、ついぞなかったことでした。夜でも、しばらく家を明けるお堂のおこもりの時でも、この山の部落では、こうも固く戸を閉めるなどということはなかったのでありました。この奥山へ、盗人がやってきたためしもありませんでした。この赤陽の照るのにと、木地屋は合点がゆかぬのでした。

源蔵はいったん帰りかけて、それからまた退き返して来ました。障子に穴をあけて、中を覗いてみました。しばらくの間、薄暗い狭い家の中をじっと目をこらして覗いておりました。そして、そのうちに、事のあらましがわかってきたのでありました。薄暗い家の中では、物がはっきりとは見えませんでした。しかしやがて、まずその臭いに、この男はぴんときたのでありました。そしてそれから、事の騒ぎがはじまりました。

山から戻ってきたおりんが、開け放した家の中に立っている源蔵をみつけた、そのときの有様をば、皆は後々までの語り草にしました。おりんが、半狂乱になって源蔵にむしゃぶりついて行くところを、折りしも駈けつけて来た源蔵の女房が、目撃したのでありました。それは人間の子というよりも、まるで山猫のお化けに近かったと触れまわりました。物もいわずに頭の髪の毛を逆立てて、背中に負うた籠もおろさばこそ、手にしたがんじき振り上げてと。なるほどいかな男の源蔵も、その時ばかりはおりんの気迫に手も出ずに、つい後ずさりをし、尻餅をつき、頭を押さえておりまし

た。ひたいからは、血が流れておりました。たかが十二や三の女の子にと、この男は後で何度もいうたことでありました。

おりんは、皆に寄ってたかって棕櫚の荒縄でしばられました。庭の柿の木に吊せ、という者もありました。谷川に一晩も二晩もつけておけという者もありました。ばばの弔いの問はこのおりんを決して近づけてはならぬといいました。なまじっかの事では死者の霊がおりんから離れることができぬのでありました。

おりんは庭の隅の、ばばが藁を打っていた石むろの中に閉じこめられました。皆はおりんを遠巻きにして口々に罵しりました。

「このたぬき憑きのおりん！　いちらくそうしてそこに居れ！」

「かわいそうに！　ばばは炬燵の中で迷うておったぞ。ひどいことするおりんじゃ！」

「それもこれも、もとはというたらばばよ。のたれ死したほいとの子を拾うてきて、法外な情けをかけたりしたけんじゃ。かくれ里の由緒ある血をひくじゃのと、ばばらしい作り話を植えつけて。かわいがりようも尋常じゃない。あれで増長せん子がおろうか。男まさりでふてぶてしゅうて！もとはというたらばばの自業自得じゃ。」

「捨て子を拾うて育てた上で、こなしうちで返されるとは。まこと因果なばばぞ。」

「みとれ、おりん。今にばちが当るけんの。そうじゃ。ようけいうこともない。今日限り山を出てけ。西へなりと東へなりと、どうせほいとの生れじゃからは、好きなところへ行てしまえ。」

りんは、泣いてはいませんでした。気のすむまで暴れたそのあとでは、憑きものが落ちたように、さわやかに黙しておりました。体にくいこむ縄目も、慣れてくると、それほど痛うも苦しゅうもありませんでした。何をいわれてもだまっておりました。唾を吐きかけられても、頭から水をかけられても、棒で小突かれても、蹴られても、ただひたすらに沈黙しておりました。

「強情な子じゃ。ほんに怖い女の子じゃ。これほどの子は、見たことも聞いたこともない。」

皆はそういいました。

りんのおらぬところで、ばばの弔いがおこなわれました。部落の者が集って、二日に渡ってねんごろな弔いをしました。葬殮の鐘の鳴るのを、おりんは、ひとり石むろの中で聞いておりました。初冬の風にのって、寺から読経の声や、線香のにおいが、流れてきました。からすが、いつもの日よりも騒がしゅうに鳴いておりました。山風にのって、弔いずしの酢のかおりも、かすかに漂うてきました。空き腹の身にはそれがこたえました。唾をのみこみのみこみして、おりんはそのかおりを胸いっぱいに吸いこんだのでありました。

夜、うとうとしたかと思うと、すぐに目をさましました。ほの白い月夜の晩でありました。夜露の下りたひかった庭に、柿の古木が、一本突き立っておりました。誰かがやってくる気配がしました。それは、あの野良犬でありました。犬はそっと近寄って来て、夜目に透かして、おりんを見ておりました。やせた野良犬の丸う巻いた尾が、月夜の地面に影をつくっておりました。ぼんやり見ていると、くるりと巻いたその影は、でんでん虫のようでありました。ときにはその影がぴんとの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c